

# 石牟礼道子の降り立つ「書く」境位

―乳幼児期の世界と「言葉」忌避の意味―

松本 昭彦\*

## 【要旨】

石牟礼道子が作品を書く行為は、言葉にならないものを言葉にする、他者の（あるいは自他の区別のない）言葉にならないコトバを自らを通路として言葉に変換して伝える、というものであった。一見逆説的なこの「書く」行為が、どうすれば、どのような足場からすれば可能だったのか、そして、それに乳幼児期の世界や「言葉」がどう関わるのか、井筒俊彦の言語哲学も参考にして、考察した。

石牟礼自身の幼児期をモデルとした自伝的作品や、エッセイ等を材料に考察すると、石牟礼は、誰かの言葉にならないコトバ・思いを引き受けて言葉にするために、自らの内面の深奥―そこは、故郷の元型としての「水俣」でもあり、「古代」でもあった―まで投身し、自身を含めた世界の本源的未分化・未分節の境位から「生まれ直す」ことを繰り返し続けたことがわかった。これについては、石牟礼の無意識のあり方が、井筒俊彦の言う「言語アラヤ識」に近いことも傍証となる。

【キーワード】石牟礼道子・『椿の海の記』・幼児期・言葉・井筒俊彦・言語アラヤ識

\* 三重大大学教育学部

## 【本文】

一 はじめに

石牟礼道子は、作品を作ること、書くことに関し、

○ ことばにうつし替えられないものは心にたまるばかり、わが胸に湧いて動かぬ黒い湖の底から、この一冊を送り出してしまいうことになりました。

（『椿の海の記』あとがき・『石牟礼道子全集 不知火』第四巻）（注1）

○ 初期水俣病闘争では、発言しにくい質の情念を、なんとか言葉にしたいと思って、それを発言する層と対面させたく思い、いささかの試みをやったつもりだったが、どうしても文学じみてしまう。

（「言葉にならない」・『全集』第九巻）（注2）

と書いている。また、『苦海浄土』を詩を作っているつもりだったと言（注3）、『椿の海の記』を叙事詩の様式を取ろうとしたとも言（注4）石牟礼は、「詩人」という存在を次のように表現している。

○ 言葉というものはどこから生まれてきたのか。言葉にできない声音で、この世はみちみちている。詩人とは、ふつうには聴こえない生身の山びこを肉声として聴きとれる人ではなからうか。文字というのは、そういう山びこをとらえる網の目としてこの世に生まれた

のではあるまいか。

『葭の渚 石牟礼道子自伝』第四部・『全集』別巻（注5）

石牟礼自身が自らを「詩人」と考えていたとまでは言えないかもしれないが、自身が作品を書くことが、「ふつうには聴こえない生身の山びこを肉声として聴きと」り、文字に刻み込む役割を担うことという意味はあったと言えるだろう。石牟礼作品を深く読み込み、対談もされた若松英輔氏も、

○ 誰かの心にある、言葉にならないものに出会ったとき、それが石牟礼道子の書き手になる瞬間だった。

○ 書き手に求められているのは、自らの思いを込め、工夫をこらすことよりも、思いを鎮め、どこからかやってくる無音の「声」を聞き、言葉の通路になりきろうとすることだというのである。

（若松英輔『常世の花 石牟礼道子』（注6）

と評されている。

石牟礼の書く行為は、言葉にならないものを言葉にする。自らが主体となつて言葉を作るのではなく、他者の（あるいは自他の区別のない）言葉にならないコトバ（注7）を自らを通路として言葉に変換して伝えるというものであった（注8）。本稿では、石牟礼の、言葉にならないものを言葉にするという、一見逆説的な「書く」行為が、どうすれば、どのような足場からすれば可能だったのか、そして、それに乳幼児期の世界や「言葉」がどう関わるのか、井筒俊彦の言語哲学も参考にして、考えてみたい。

ところで、石牟礼が文字通りの「書く」ことを始めたのは、小学校に上がって、カタカナを覚えてからである。その時のことはこう記されている。

○ 小学校に上がると、世界が一举に広がった。文字を覚えて、「つづり方（作文）」というのを書いてみると、現実という景色が、いのちを与えられて立ち上がるのである。つづり方の時間になると嬉しくて、鐘が鳴っても書きやめたくなかった。

（『葭の渚 石牟礼道子自伝』第二部）

○ 小学校に入ってからこの世に「文字」というものがあることを知った時の驚きといったらなかった。世界がぱあーっと展げる、とはあの頃のことをいうのであろう。

アイウエオを綴り合わせると、この世も（あの世）も無限に再現できるのである。

（「本との出会い」・『全集』第四巻）（注9）

○ 子どものころ、文字をつづり合わせれば、もうひとつの世界が組み立てられるというのがたいへんおもしろかった。小学校一年生のとき、つづり方の時間に先生がいくら書いてもいいとおっしゃったので書き始めたら、もう書いても書いてもとまらないわけです。とまらないのがこわかったですね。

なぜなら、見えている世界というのは奥深いたいへんな世界なわけですが、書き始めるとさらに奥深く感じられて、この見えている世界全部を書かなければいけないのだろうか、どこまで書けばいいのかと思うと、数を数え始めて数が無限だとわかる恐ろしさと同じように、たまらなく恐ろしくなるのでした。数が無限につづくように、この世界は自分の生まれるずっと前からあって自分が死んだあともずっとつづくだろう、これを全部書かなければいけないのかと思うと、最初は喜んでつづり方を書いていても、あとはどうなるんだらうと思うわけです。ごはんも食わずに眠らないで書かなければいけないのだろうか。

（「作家」・『全集』第四卷）（注10）

文字を使えばこの世もあの世も再現できる、もう一つの世界を組み立てられる、と初めは嬉しく面白くなったが、書いても書いても書ききれず恐ろしくなった、という述懐である。世界の総体を書こうという意識も深遠だが、また、恐ろしくなるのはなぜであろうか。

当面、この疑問を考えるために、文字を習う以前、乳幼児期の石牟礼の世界と言葉に対する意識を見て行くことにする。

## 二 「みっちゃん」の「言葉」観

石牟礼には、『椿の海の記』や『あやとりの記』など、自らの幼少期をモデルにした自伝的小説がある。本節では、これらを主な材料として、幼児期に言葉や世界というものをどのようにとらえていたかを考察する。

四、五歳の石牟礼自身と等身大の「みっちゃん」が主人公となる『椿の海の記』で、石牟礼は言葉に対して期待していない。それはむしろ忌避されるものだったと語っている。

○ 人の言葉を幾重につないだところで、人間同士の言葉でしかないという最初の認識が来た。草木やけものたちにはそれはおそらく通じない。：あの深い未分化の世界と呼吸しあったまんま、しつらえられた時間の緯度をすこしずつふみはずし、人間はたったひとりでこの世に生まれ落ちて来て、大人になるほどに泣いたり舞うたりする。そのようなものたちをつくり出してくる生命界のみなもとをも思っただけでも、言葉でこの世をあらわすことは、千年たっても万年たっても出来そうになかった。

（『椿の海の記』第八章）

○ （じやのひげの）その碧いちいさな粒は、この世の成り立ちとしてつくり調和しておかれていた。ことばを持っている世界を本能的にわたしは忌避していた。

（『椿の海の記』第八章）

○ だまって存在しあっていることにくらべれば、言葉というものは、なんと不完全で、不自由な約束ごとだったろう。それは、心の中にむらがりおこって流れ去る想念にくらべれば、符牒にすらならなかった。

（『椿の海の記』第九章）

小説ではなく、実際の自分自身の記憶としても、次のような記述がある。

○ 無語の世界がもしあるとすれば、そこに生まれたら、さぞかししんとして、よからうなあとという感じが、ことばを発する以前からありました。その、のぞましい世界を垣間みた、いちばん最初の記憶がひとつあって、たぶんその後の自分を導いていると思えるふしがあります。

（「ことば以前」・『全集』第九卷）（注11）

この、言葉というものに期待せず、むしろ言葉のない世界を好ましく感じることは、右の引用にも「その後の自分を導いていると思える」とあるが、幼児期に限らず、後年のこととしても語られている。

○ 人様の前で話するのは、いろいろ不思議で、それがわからないものですから、言葉というのがとても小さくなりまして、自分が生きていくことが、言葉では表現できないので、言葉はそれぞれ持っているけれども、全部消してしまえば、息をかわしあって生きている世界というのが見えてくるんですが……

（「この世が影を失うとき」・『全集』第四卷）（注12）

このように、石牟礼は幼児期に（さらには後年にも）言葉を不自由なものと感じ、言葉のない世界を好ましいものとしていた。

この理由として、先の引用にも出てきたが、世界との「未分化」（未分節）ということが非常に重要であったようだ。まず赤んぼ時代のことをどう表現しているか見てみる。

○ ものをいいえぬ赤んぼの世界は、自分自身の形成がまだととのわぬゆえ、かえって世界というものの整わぬずっと前の、ほのぐらい生命界と吸引しあっているのかもしれない。ものごころつくということは、そういう五官のはたらきが、外界に向けて開いてゆく過程をもいふのだろうけれども、人間というものになりつつある自分を意識するころになると、きつともうそういう根源の深い世界から、はなれ落ちつつあるのにちがいがなかった。

（『椿の海の記』第八章）

○ この世は生命あるものたちで成り立っている。この生命たちは有形にも無形にも、すべてつながりあって存在していた。赤んぼうというものはまず、言葉を知る前に、視覚と聴覚と、それから、見えない触覚のように満を持しているおどろくべき全感覚で、他の存在について知覚しながら育つのである。ものごとを在るがままに理解し、肯定することならば、この世と幼児とは、出遭いの最初からその縁を完了させてもいたのである。

（『椿の海の記』第九章）

赤んぼは、言葉を持たないからこそ、あるがままの世界とつながりあ一体化している、言葉を持ち自分を意識し始めると、一体性は失われて行くというのである。

次に、幼児期の「みっちん」の様子を見てみる。幼児期になると、も

ちろん言葉を覚え始めるわけだが、一方でみっちんは人間世界の住人になりきらず、むしろ言葉を介さずに動物や自然、その背後にいる神霊、さらには世界全体とまじわり、つながって共生していた。

○ 「山に成るものは、山のあのひとたちのもんじゃないけん、もらいにいたても、悠々とこさぎ取ってしもうてはならん。カラス女の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃないけん、ひかえて、もううて来」

おもかさまがささやくように、いつもそういう。まだ人界に交わらぬ世界の方に、より多くわたしは棲んでいた。

（『椿の海の記』第一章）

○ いのちの精が炎え立っているようで、わたしはあのひとたちの気配とまじわりながら、草の穂などを噛んでいるのだが、山童の姿などはやはり見えないのであった。

（『椿の海の記』第一章）

○ この世の成り立ちを紡いでいるものの気配を、春になるといつもわたしは感じていた。

すこし成長してから、それは造物主とか、神とか天帝とか、妖精のようなものとか、いろいろ自分の感じているものに近い言葉のあることを知ったが、そのころ感じていた気配は、非常に年をとってはいるが、生ま生ましい楽天的なおじいさんの妖精のようなもので、自分といのちの切れていないなものかだった。

（『椿の海の記』第八章）

小説ではなく、後年の対談においても、四、五歳の時、母に連れられて水俣川の上流の小さな谿谷に行つた際の印象を、

○ あの川の谷底に連れて行かれたとき、なんて言いますかね、こう、一種生命の爆発現象というか（笑）。「ここに来たかった！」って

いうか、なんていうか。……ふっと見上げると百合の花なんかがこの崖からね、咲いている。

空に浮き出ている百合の花つていうのは宇宙を表している。宇宙とすべての生命が呼吸してるみたいだし、私も呼吸してるみたいだし、花々は山に根づいています。……

（石牟礼道子・野田研一・高橋勤「まず言葉から壊れた」

・『石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ』（注13）

と語っている。幼児期のみっちゃんは、言葉を使つてとらえるのではない形で、この世のすべてのいのち、神霊とも魂を交わしあい、共生していた。

ただし、もちろんそれは赤んぼのころのような完全な一体化ではなく、自分とは別の存在として神霊やいのちを感じた上でであった。

○ 山の畠につれられて来て、秋の山野の草の中をさまよっていることはわかっていても、不思議な、処理しようのない自他の存在感がなやましかった。自分はどこへゆくのか、五官のすべてを総動員して、わたしは知りがり、ほとんどやつれくらしていた。草とか水とか、麦とか雪とかになり替つてみることは、むしろ安息でもあったのだ。

（『椿の海の記』第八章）

○ 生命の本源というのか、川原の石も水も、その音も崖を形づくっている草も背後の山々も呼吸しあっていたが、わたしは不思議な孤独を感じていた。

（『葭の渚 石牟礼道子自伝』第一部）

ここで、「自他の存在感」といい、「孤独」というのは、赤んぼが本源の世界と完全に一体化しているのと比較してのことであろう。金石範氏は、石牟礼の幼児期のあり方を、

○ 完全に未分化の赤ん坊の生と死のあいだの境界、夜明け以前の暁闇の未分化とは違う、人界に、意識界に幼ない片足を入れての未分化。

（金石範『椿の海の記』の巫女性と普遍性・『全集』第四巻「解説」と評している。

石牟礼の幼児期とは、言葉を覚え始め、自分というものが出来かかって、自他の存在が意識され始めたために、かえって自分とまわりのいのち、神霊との一体感を感じるといふ時期だったと考えられる。ただいずれにしろ、石牟礼にとって乳幼児期の、自身を含めた世界の「未分化」、一体性が、言葉が必要としない感覚ともつながっていて、非常に重要であったことがわかる。

ここで、先に見たような赤んぼや言葉の捉え方は、『老子』『莊子』のそれと類似することを指摘しておきたい。（注14）

○ 第十章 心と身体とをしつかり持つて合一させ、分離させないままでいられるか。精気を散らさないように集中させ、柔軟さを保ち、赤児のような状態のままでもいられるか。

○ 第二十八章 剛強なあり方を知りながら、柔弱の立場を守つていくと、世の中の人々が慕いよる谿となる。世の中の谿となれば、恒常の徳は身から離れず、純粹な嬰兒の状態に立ちかえる。

○ 第五十五章 豊かに徳をそなえている人は、赤ん坊にたとえられる。

つまり『老子』において、赤んぼは心身が合一されたままで純粹な存在で、「道」に近いと重視されているのである。

また、『老子』には

○ 第十四章 この「一」は、その上の方が明るいわけではなく、そ

の下の方が暗いわけでもない。はてしもなく広くて活動してやまず、名づけようがなく、万物が万物として名づけられる以前の根元的な道に復帰する。これを状のない状、物のない象といい、これを恍惚という。

○ 第五十六章 本当の知者はもの言わず、もの言う人は本当の知者ではない。

○ 第八十一章 本当の言葉は華美ではなく、華美な言葉は本当ではない。本当の弁論家は弁舌が巧みではなく、弁舌が巧みな者は本当の弁論家ではない。本当の知者は博識ではなく、博識な者は本当の知者ではない。

ともあって、「道」は名づけようがなく、言葉には限界があることが強調される。

『莊子』においても、「道」とは、世界すべての本源であり、全てが一体化している混沌の状態である。『莊子』には、

○ 人間の言葉というものは風や波のように、ゆらぎやすく定めのないものであり……  
(第四 人間世篇)

○ 万物は斉しいという事実と、「万物は斉しい」という言葉は同じではない。逆に「万物は斉しい」という言語は、万物は斉しいという事実と同じではない。だから先人も「無言であれ」といったのである。  
(第二十七 寓言篇)

ともあって、言葉は世界を正しく記述しない、不完全なもので、むしろその一体性を損なうものと考えられている。

石牟礼道子と老荘思想を直接結びつけられるかどうかはいまは措くとして、石牟礼の乳幼児期の、世界が未分化で、自分とも一体性を持って命を重ねている意識やそのために言葉を必要としない感覚は、老荘の言語観に通じると言えるだろう。

そしてこのような「みっちゃん」の「言葉」観は、言語哲学が指摘する言語の側面であり、老荘思想との類似も、そこから来ていると思われる。井筒俊彦の論を見てみよう(注15)。

○ 今日、言語を論じる人たちが口を揃えて言うように、言語はコミュニケーションの重要な手段である。が、コミュニケーションの手段であることのほかに、あるいは、それ以前に、言語は、意味論的には、一つの「現実」分節のシステムである。生(なま)の存在カオスの上に投げ掛けられた言語記号の網状の枠組み、個別言語(ソシユールのいわゆる *langue*)を構成する記号単位としての語の表わす意味の指示する範列的な線に沿って、生の存在カオスが様々に分割、分節され、秩序づけられる。

○ 言語をもち、文化に生きる人間は、ほとんど運命的に、生(なま)の自然から疎外されている。存在世界を一つの「象徴の森」として経験する人間には、象徴の意味体系の彼方なるものにじかに触れるすべはないのだ。

○ 莊子。彼によれば、存在リアリティの窮極的、本源的な様態は「混沌」、すなわち、物と物とを分つ境界線がどこにも引かれていない全くの無分節である。物と物とを互いに区別し対立させる存在境界線は、すべて人間意識の迷妄の所産にすぎない。そしてこの事物識別的迷妄の源にはコトバの意味分節的働きがある。

○ 一般的に、東洋哲学の諸伝統を通じて、根深い言語不信が働いていることは注目に値する。

客観的に存在するわけではなく、言葉によってある意味恣意的に分節されて意味づけられる世界、「迷妄」とまで言うかどうかは別に、このような世界と言葉の捉え方は老荘等の東洋思想に共通し、石牟礼道

子にも通底していると考えられよう。

「一 はじめに」において、小学校に入って文字を覚え始めた石牟礼が「書く」ことをやめることができず、恐ろしくなったとあったが、こうして見てくると、それは言葉の世界分節の機能と関わっている。分節前の本源的・自然として世界を感じていたからには、自分の言葉で分節されたその一部だけを記述することはできず、自分の責任として分節の結果としての全体が記述される必要があるからである。もちろん、実際にはそんなことはできず、途中で終わるわけだが。

とすれば、後年の石牟礼が作品を書くことができるようになったのは、書くことによって世界を分節してしまうことから、何らかの形で未分化・未分節性を回復できるようになったからであろう（注16）。

### 三 石牟礼道子の「書く」足場

本節では、石牟礼が「書く」時の足場を見て行こう。それは、本源的世界の未分化・未分節性を回復する場であつたはずである。端的に言って、それは自らの郷土でもある「水俣」であつた（注17）。但し、ここに言う水俣は実際の水俣市というより、後述のように自身も「現実の風土としての故郷という意味でもなくて」と書いているように、石牟礼の内なる水俣、という面が強い。

○（水俣の漁師やお百姓さんたちが）どういう内的な世界をもっているかというところ、お魚との世界とか、草や土との世界とかそれは言葉が先にある世界でなくって、川とか海とか、そういう世界、アニミズムといってしまうと、非常に矮小化されてしまうんですね。けれども、アニミズムなんて名前をとっていつけられない広大無辺な命の

世界に住んでいる人たちがいて、私もそこにいるわけですが、そこからしか世の中をみることができなくなっている自分に気がつくんです。（中略）

（漁師・お百姓さんは）身につけた文明観とか論理を語るかもしれませんが、もっとその奥には、まだ未分化の世界をもってるんじゃないかと私は思ってしまうんです。そこにどうしても帰ってしまう。現実の風土としての故郷という意味でもなくて。

○『苦海浄土』で書こうとしておりますのは、……現の世、どのようにかすかな意味でも、魂たちが存在感を持ち合っていた世界をわたくし自身思い出してみたくなって、日本の田舎を、都会を生んだ故郷としての田舎を水俣に託して書いてみましたのです。……全的存在としてあつた世界、今もまだ辛うじて生き残っている世界を思い出したかったです。分類されたり整理されたり、捨てられたりする、高度に情報化された社会での、頭のなかだけの知識です。……じゃなくて、むしろ未分化な世界を見てみたかったです。

（「陽いさまをはらむ海」・『花をたてまつる』）  
○（幼児期を過ごした「とんとん村」について）あの神話的世界の方が健全というか……言葉の始まりとか、文字の始まりとか、人とのきずなのあり方とかは、全部そこにあるような気が今もしておりますけれども。それをさがすために文章をまた書き始めたんですね。

（『ETV特集 「花を奉る 石牟礼道子の世界」』（注18））  
○いま、かの時のことを言えば、（水俣の）大廻りの塘とは、文字以前のもののたちの願望が、あちこちから流れ寄って、見果てぬ夢を手織ってみたい、休まらぬ魂をまつたりする存在の「原郷」だっ

たのかもしれない。

〔『葭の渚 石牟礼道子自伝』第三部〕

水俣の「とんとん村」、大廻りの塘とは、全的存在としてあった未分化な世界・言葉が先にあるのではない世界・神話的世界・存在の原郷と説明され、諸作品の中でそのような空間として登場し、また「そこからしか世の中をみることができなくなっている」足場であった。そこは、父母や狂気の祖母「おもかさま」が「山のあのひとたち」とともに棲む場所であった。

この「水俣」は、時間軸で言うと、古代（前近代）に相当する（注19）。ここに言う「古代」も、日本史上の何世紀、と具体的に言えるものではなく、「神話的」とも言えるような、「近代」の反措定としての「古代」である。

○（熊本地方に台風が来た際の感想）山々がひと晩中唸っていた時の、はるかな古代へでも帰ってゆくようだった、あのなつかしさは何だろう。幼い頃よく聴いて、心をゆさぶられていた風と山の声である。神さまと一緒に住んでいた頃の、遠い遠い世界に戻ってゆくような、鳥もけものも、妖怪たちもまだ十分にすこやかで、人間とその精を、いつでも交換しあっていた時代に帰って、自分も唸り声をあげながらのびのび遊んでいる、そんな気持ちだった。

（「古代の嵐」・石牟礼道子『花いちもんめ』（注20）

○ ヒトの意識の古代的な原点として遺っていた鹿児島県境の水俣茂道という集落。

〔『葭の渚 石牟礼道子自伝』第三部〕

水俣には意識の古代的な原点が残り、幼いころの風と山は、神さまと一緒に住み、動物や妖怪とも精を交換しあう時代とも重なっていたので

ある。

そしてこのような「古代」（前近代）を足場として作品が作られることが語られる。

○（石牟礼）私自身は、さつきも申し上げたように、ともかく二百年ぐらい前まで戻って、そこからのを言おうと思っっているんです。前近代こそ大事だと思っているんです。

（石牟礼道子・佐藤登美「われわれの行く手にあるものの」・『石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ』（注21）

○ からだはこの近代社会のなかに置いているんだけど、心がなじまない。そういうところからものを書いていると思うんです……

（「人間に宿った自然」・『全集』第七巻）（注22）

このような石牟礼の「書く」視座は、

○ 彼女のそうした語り、文体がどこから生れたのかは謎である。資質といつてよいのかも知れないし、近代的理性によって整序される以前の世界把握のしかたが、何らかの遺伝法則によって出現しているのかもしれない。

（渡部京二「新たな石牟礼道子像を」・『花を奉る 石牟礼道子の時空』（注23）

とも評されているのである。

以上見てきたように、石牟礼は、後年になって作品を「書く」足場として、乳幼児期のような、言葉によって世界が分節される以前の、未分化・一体性を希求する。逆に言うと、石牟礼は作品を書く時、乳幼児期の世界・言葉観に帰っている、とも言えるだろう。

○（若松）現代の書き手たちは努力して良い作品を書こうとします。でも『苦海浄土』はそのような作品ではない。作品を拝見してい



ると、石牟礼さんが自分で努力して書いた、というのとは少し異なる様子の言葉があるように感じられます。

（石牟礼）はい。

（若松）そういう作品が生まれてくるとき、書き手の内面では何が起こっているのか、もう少し聞かせてください。

（石牟礼）生まれ直す……といった感じなのです。世に同じ人は二人といません。それぞれが、刻々と変化しながら毎日を生きています。そうしたことを深く感じるのです。

（若松英輔『常世の花 石牟礼道子』（注24）

ここで「生まれ直す」というのは、まさに、乳幼児期の世界・言葉への感覚を改めて賦活して、自他の未分化な状態となり、言葉を介さずに誰かのコトバ・思いを受け取って、作品の言葉を紡ぎ出している、ということであろう。この「生まれ直」しは、自らの内面の最も深いところで行われる。

○ 短歌に限らないが、物を書くということはわたしの場合、人生の深淵に投身することである。

（『葎の渚 石牟礼道子自伝』第三部）

では、なぜ「深淵」においてそれが可能だったのか。

○ さつきからへどもど申している生命世界の、一番奥にあつて、自覚しなくても、私というものに宿っているはるかな世からの生命の意思、……自分のなかに、遠いはるかな世からのいのちが動いていて、生きているんだと思いたいものですから……。

（『陽いさまをはらむ海・石牟礼道子『花をたてまつる』）

○ 中国古代学の白川静先生は文字の成立の以前には、ながいことばの時代の意識があり、金文や甲骨文字の形にそのあとが歴然と系統的に残されているのだと言われる。

「もしこの文字の背後に、文字以前の、はかり知れぬ悠遠なことばの時代の記憶が残されているすれば、漢字の体系は、この文化圏における人類の歩みを貫いて、その歴史を如実に示す地層の断面であるといえよう」（『漢字』岩波新書、一九七〇年、四一五頁）。わたしはこのくだりを読むごとに、めまいのような昂奮をおぼえる。「文字以前の、はかり知れぬ悠遠なことばの時代の記憶」が、わたし自身の無意識界で目ざめようとして、言葉の大地がふいに足もとでざわめきはじめ、身震いするのである。

（「祖様でございますぞ」・『全集』第一六巻）（注25）

石牟礼は自らの内部・無意識下に、自身の生まれてからの体験だけでなく、時間・空間を超えた、はるかな世からの生命の意思や記憶が宿っていると言う（注26）。それは人類以前のすべての「生類」の「記憶」さえ入っているようである。これは言い換えれば、やはり世界全体が未分化で無分節の本源的世界に非常に近いものと言えるだろう。そこにおいてこそ、「生まれ直」しが可能となる。

ここで再び、井筒俊彦の言語哲学を参考にしたい。井筒は、イスラム思想や仏教の唯識論をもとにして、無意識内に「言語アラヤ識」という領域を想定する。

○ まだ経験的意識の地平に、辞書的に固定された意味として、出現するに至っていない、あるいは、まだ出現しきっていない、「意味可能体」、つまり、まだ社会制度としての言語（ラング）のコードに形式的に組み込まれていない浮動的な意味の貯蔵所として、上述の意識構造モデル第三層を形象化するのである。このように形象化された言語アラヤ識は、半ば出来かけの、まだ一定の「名」をもたない、不定の意味を収蔵する場所であるばかりでなく、意味らしきものが、ほとんど全く分節されない漠然とした形で、始めて生れ出

てくる場所でもある。要するに、すべて意味と呼ばれるものが誕生し生育する意識下の領域である。

○ 意味「種子」が、具体的に実現されるのは、個人個人の意識内であるが、言語アラヤ識そのものは、根源的に、個人の心の限界を超出する。それは、水平的には個人の体験の範囲を越えて拡がり、垂直的には、これまですべての人が経験してきた生体験の総体に延びるところの、集合的共同下意識領域として表象されるべきもの

○ もし我々がコトバの深層の意味構造に気づき、それに注意を向けるなら、文化の本源的语言性に関する我々の見方は根本的に変わってしまうだろう。使い古されて色褪せた記号のコード、ほとんど化石化した意味の構成する、固くかたまって動きのとれないシステムのかわりに、創造的エネルギーにみちた意味マンダラの澁刺たる動きを、我々は見るとしよう。そして、この全体的意味マンダラの一領域として眺められる時、一見、制度化され、因襲化し、枯渇し切ってしまったかのように思われていた「外部言語」すら、意外な生命力を示しはじめるだろう。なぜなら、コトバの表層構造も、本当は、アラヤ識それ自体の外化形態にほかならないのだから。

言語アラヤ識は、時間・空間を越えて「これまですべての人が経験してきた生体験の総体に延び」る領域であり、そこにある「意味種子」は、まだ言葉になり切らず、分節機能を持つ前のエネルギー体である、とされる。石牟礼の言う自らの無意識は、井筒の「言語アラヤ識」ととてもよく似ていると言えよう。井筒はここから、言語アラヤ識と外部言語を十分に交流させることで言語が活性化し、その「意味マンダラ」を他言語・他文化と接触させることで自らの文化も更新できると説くのだが、これも、石牟礼が

○ 言葉自体が日本人の情念から抜け出して、概念語として行き来し

て、ちつとも心が籠もらないし、人間のもっている原質を離れて、ただ物が流れる機構があるような具合に、言葉も流通しているだけのような気がしますもので、話していてもどうもピンとこない。そうじゃない、生きてる実感に即したやりとりがあるはずだけれどなあという、何か身悶えするような感じで、言葉をどうやったら復活させることができるだろうかと、いつも思っているんですね。

(石牟礼道子・佐藤登美「われわれの行く手にあるもの」・『石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ』)

と言うのと重なる。言葉を、情報を乗せるだけの無機質で乾いた道具として使うのではなく、「生きてる実感」を伴う、魂の通ったものにしてやりとりがしたい、というのである。

石牟礼は、作品を書く時、誰かの言葉にならないコトバ・思いを引き受けて言葉にするために、自らの内面の深奥にあるコトバたちの場―そこは故郷の元型としての「水俣」でもあり、「古代」でもあった―まで投身し、自身を含めた世界の本源の未分化・未分節の境位から「生まれ直す」ことを繰り返していたのである。これを、本稿冒頭で設定した問いの答えとしたい。

そして、そのようにして言葉を紡いで送り出すことは、石牟礼道子にとって、時に「幸福」とも言えることであつた。

○ あるとき、石牟礼さんにとってどんな時が幸福ですかと聞かれて、石牟礼さんが即座にこう答えられたのはびっくり覚えている。それは、私が風になって吹かれているとき、自分が感受性に満ちあふれて宇宙と一体化していると実感しているとき、その時が一番幸福で、私は風にそよぐ雑草の一本として精霊の物語を伝えていきたい、と言われた。

(岩岡中正「天地の間」・『花を奉る 石牟礼道子の時空』(注27)

【注】

(1) 単行本刊行は、河出書房・1976年10月。

(2) 初出は、『月刊 地域闘争』・1980年10月号。

(3) (若松)『苦海浄土』は、どんなジャンルにも収まらない作品です。ノンフィクションでも小説でもエッセイでもない。以前、どんなお気持ちでこの本を書きになったのかとお尋ねしたら、「新しい詩の形を示してみたいと思った」とおっしゃった。石牟礼さんにとって詩とはどういうものですか。

(石牟礼) 近代詩というのがありますね。古典的な詩もあります。それらとは全く違う、表現が欲しかったんですよ。水俣のことは、近代詩のやり方ではどうしても言えない。詩壇に登場するための表現でもない。闘いだと思ったんです。一人で闘うつもりでした。今も闘っています。

(若松英輔「『苦海浄土』が生まれるまで」・『常世の花 石牟礼道子』・亜紀書房・2018年5月。  
初出は「新潟日報」・2016年3月27日)。

(4) (石牟礼)『樁の海』では、それでもっと、口説きそのものに近づけたくて、叙事詩というかそんなふうな様式でやりたかったのですが、どうも破綻だらけで、意図したものとは大そうずれちゃいました。

(『石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ』・河出書房新社・2000年12月。初出は、石牟礼道子・原田奈翁雄『樁の海の記』をめぐって』・『エディター』・1977年3月)

(5) 単行本刊行は、藤原書店・2014年1月。

(6) 初出は、前者が、「偉大なる名無き者」・「共同通信」・2018年2月16日、後者が、「亡き者たちの季節」・「熊本日日新聞」・2018年2月24日。

(7) 井筒俊彦・若松英輔氏は、「形の定まらない意味の顕われ」(若松英輔『生きる哲学』・文春新書・2014年11月)、「事象が存在することを喚起する力動的な実在、すなわち存在を喚起する「エネルギー」体」(若松英輔『井筒俊彦 叡知の哲学』・慶応大学出版会・2011年5月)を「コトバ」と表記する。本稿もそれに倣う。

(8) このことは、石牟礼が「巫女的である」とよく指摘されることと関連する。石牟礼は、他者が自分に入りこんだり、他者と重なったりする経験をよく語っている。

・ この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ。

(『苦海浄土』第一部・第三章「ゆき女きき書」・『全集』第二巻)  
・ たしかそのとき、三つ子の魂と、八十くらいをめくらさまの魂とが、入れ替わったのです。しかし、入れ替わったとはいっても、もとの魂を持ったまんまだがいの魂の中に這入るのですから、ふたつの魂が重なったものを感じたり、世界を眺めたりするのでした。

(『あやとりの記』第一章・福音館書店・2009年3月。『全集』第七巻)

(9) 初出は、『ほるぷ新聞』・1970年3月15日。

(10) 初出は、『女としごと』第一巻・筑摩書房・1983年4月。

- (11) 初出は、『ことば・詩・子ども』・世界思想社・1979年4月。  
 (12) 初出は、『わだつみのこえ』・六十一号・1975年11月(わだつみ会集会講演「この世が自分の影を失うとき」・1975年8月15日による)。

- (13) 単行本刊行は、河出書房新社・2000年12月。初出は『フォリオα』・五号・1999年2月。

- (14) 『老子』は岩波文庫『老子』(蜂屋邦夫・訳注)、『莊子』は中公クラシックス『莊子』(森三樹三郎・訳)から、口語訳を引用した。

- (15) 井筒俊彦の論の引用は、すべて「文化と言語アラヤ識 ―異文化間対話の可能性をめぐって―」・『意味の深みへ 東洋哲学の水位』(岩波文庫・2019年3月)による。

- (16) 「書く」際のことについてはないが、石牟礼は

原初から伝えられてきたいろんな生命系があつて、それぞれの個体史があつて、それをずつとさかのぼっていけば、さらにつながってしまう、そういう生命系の一番奥にあるもの、そういうところからくる意志があつて、私どもは今生きていると思ううんですけれども、そういう一番奥の、今生きている私どもに対する生命の意志、そういう世界からの呼びかけをきいているときがあると思うのです。

そこへ立ち返ってみれば、どんなにかこの文明が高度化されて、個々が分裂してお互いを分断していくような世界が、なぜそうなってしまったのか、よく見えるのではないか、自分たちが来た所にたどってゆける道すじみたいなものを見つけておきたい、自分たちの生まれてきたそういう世界を再現しておきたいというか、復元しておきたいといえますか、そういう回帰本能にしょつちゅうかられておりましてね。

- (「陽いさまをはらむ海」・『花をたてまつる』・葦書房・1990年6月。初出は、『地獄と人間』・朝日新聞社・1976年9月。) という意識を持っていると語る。

- (17) 因みに、水俣の風土には、『老子』に言う「小国寡民」の風も感じられる。

(熊本県警察本部編『管内実態調査書 天草編』によると)「八幡の瀬戸」でとれた鯛の味は天下一品と自賛していれば、それ以上の望みはなかったようである(昭和二十七年ごろまでの調査)。考えようでは貧しいが、何と小さな村の人びとの、心ゆたかなことだろう。調査員の巡査さんたちも、宗教の項で村民の浄土宗と真宗とにふれ、「純朴である」と書き添えている。

- (18) NHK教育テレビ・2012年2月26日(日)放送。  
 (19) 一方、石牟礼にとつて、「近代」は水俣病に行き着く時代である。

・「目の前にはチツソという近代化学工業の工場がごさいます  
 ……近代の図式をある意味で結集したような工場」  
 ・「近代文明の行きつく果てを私は水俣でいやというほど見てしましました」

(「人間に宿った自然」・『全集』第七巻。初出は、『葛のしとね』朝日新聞社・1994年3月。1989年

8月21日の長崎大学評議会夏期研修の講演による)

- (20) 単行本刊行は、弦書房・2005年11月。

- (21) 初出は、『看護展望』・一八号・1993年12月。

- (22) 初出は、19に同じ。

- (23) 単行本刊行は、藤原書店・2013年6月。初出は、『環』・5号・2013年4月。

(24) 初出は、「莊嚴の詩学 ―石牟礼道子の原点」・「三田文学」・2015年秋号。

(25) 初出は、岩波書店「思想」・2000年2月号。

(26) 石牟礼は自らの幼児期を、「海の向こうにその天草が見える浜辺に立つと、天と海との風光にまぶされて、はるかなはるかな無意識から来た子のように、茫々とその浜辺を往ったり来たりしてすごした」(「渚」・『花いちもんめ』)とも語った。

(27) 初出は、『全集』第12巻「月報」・2005年5月。